

平成 30 年度 長野県看護大学運営協議会 議事要旨

日 時 平成 30 年 11 月 9 日 (金) 午前 10 時から正午まで
場 所 長野県看護大学 管理棟 大会議室

【出席者】

委員

笠原 悦男	松本歯科大学 衛生学院長	
川口 寿賀糸	長野県訪問看護ステーション連絡協議会 顧問	
川島 良雄	長野大学社会福祉学部 学部長	
久保 貴三子	長野県看護大学同窓会 諏訪中央病院 看護師長	
斎藤 依子	長野県立こども病院 副院長兼看護部長	
代田 とみ子	飯田市立病院 看護部長	
中村 杏子	飯島町 健康福祉課長	
福澤 秀宏	駒ヶ根商工会議所 副会頭	
藪原 明彦	上伊那医師会 小児科医	(五十音順 敬称略)

看護大学

学 長	北 山 秋 雄	
学部長	渡 辺 みどり	
研究科長	安 田 貴恵子	
教 授	坂 田 憲 昭	(運営委員会委員)
教 授	伊 藤 祐紀子	(〃)
教 授	藤 原 聡 子	(〃)
事務局長	宮 村 泰 之	(〃)
次長兼総務課長	刈 間 俊 也	
教務・学生課長	鮎 澤 宏 和	

県医療推進課

副参事兼課長補佐兼看護係長	松 本 清 美
看護係 担当係長	西 村 温

【議事次第】

- 1 開 会
- 2 学長あいさつ
- 3 議 事
 - (1) 看護大学の概要について
 - ア 大学の概要
 - イ 入学者・卒業生の状況
 - (2) 平成 33 年度（2021 年度）入学者選抜について
 - (3) 第 2 期信州保健医療総合計画について
 - (4) 看護大学への期待・要望事項等について
- 4 閉 会

【配付資料】

- 1 長野県看護大学の概要
 - 2 平成 30 年度 当初予算の概要
 - 3 入学志願者・入学者等の推移
 - 4 平成 29 年度 卒業生・修了生の進路状況
 - 5 平成 33 年度（2021 年度）長野県看護大学入学者選抜について
 - 6 第 2 期信州保健医療総合計画
-
- * 自己点検・評価報告書（平成 29 年度分）
 - * 看護実践国際研究センター 平成 29 年度 実績報告書
 - * 平成 30 年度 出前講座パンフレット
 - * P A T H W A Y

1 開 会

2 学長あいさつ

今年の4月に学長になり、はや7か月が経過しました。この間のことをいくつかお話しします。

ひとつは、国際学术交流についてです。8月21日に、サモア国立大学と覚書を新たに締結しました。同大学とはこれまでも長い間交流がありましたが、これまでの主に学生同士の交流から、人材育成を中心にした交流へとレベルアップをしました。また、9月2日には、中国の揚州大学看護学院と覚書の調印をしました。御存知のように、中国では高齢化の問題、特に認知症高齢者への対応が課題となっています。地域コミュニティにおけるケアについて、看護がどのようにコミットメントできるのか揚州大学と一緒に進めていきたいと思っています。中国を含めたアジアとウイン・ウインの関係を結んで学术交流を進めながら、日本およびアジアにおける看護学のハブカレッジを目指していきたいと考えています。

もうひとつは、大学基準協会による大学評価についてです。今回の調査は、内部質保証システムの有効性に注目して行われました。事前の調査で、本学は非常に高い評価をいただきました。特に高い評価を受けたのが、地域貢献についてです。御存知のように、この大学には温水プールがあります。それを活用した地域高齢者への水中運動の実施とか、遠隔ケアシステムの開発、里山看護学などについて現地調査で意見交換をしました。私は、地域貢献はこの大学にとっての大きな柱だと思っています。

私はこれから4年間この大学を率いていくわけですが、私の行動理念の第一は、「地域に学び未来を拓く」です。私たちは、地域とともに発展していくことを常に考える必要があると思います。また、4つの行動目標を掲げています。1つはグローバルということ。2つ目は、チャレンジ。変化するために常にチャレンジスピリットをもって世界に打って出ていきたい。3つ目は、この大学の特徴を踏まえて、ケアリング。他人に寄り添い、思いやることがとても重要だと思います。4つ目が、ウィズダム。知識よりも知性、知性よりもウィズダムだと思っています。この4つを行動目標として4年間この大学を率いていきたいと思っています。

10月29日、30日に行われた大学基準協会の現地調査では、本学の委員会などの組織が相互に関連しながら有機的に結びついて機能しているかどうか。そして、PDCAサイクルを活用して適切な点検・評価、改善が行われているかどうかを質問されました。また、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーと大学の教育理念、教育目標がどのように関連して効果的な教育がおこなわれ、適切に点検・評価、改善が行われているかどうかについても議論がなされました。評価委員の皆さんからも様々な意見がありましたが、総じて評価は高いものでした。大規模な大学と違って取り組みが丁寧であるとか、教員と学生との距離が近く、コミュニケーションがよく取れていると感じたとか、教員や学生の活動が活発に感じられた、学生インタビューでこの大学を選んだ理由を聞いたところ、この大学にはいい学生が多いからとの答えがあったとして、いい学生を育てていると感じたところのご意見をいただきました。

本学は、県の直営大学です。独立行政法人化されると、理事長や理事会がリーダーシップをとる面もありますが、法人化していない本学では学長がその代わりになります。現地調査では、学長のリーダーシップについても議論になりました。学長のリーダーシップはとても大切だと思いますが、トップダウンだけではうまくいかないこともあります。トップダウンとボトムアップをうまく整合しながら、大学運営にあたっていきたいと思っています。

また、この運営協議会のように、外部の識者の皆様のご意見をしっかりと把握することも重要と考えています。今後ともご理解とご協力をお願い申し上げ、あいさついたします。

3 議 事

(1) 看護大学の概要について

ア 大学の概要

- ・概要及び平成30年度予算について、事務局長から説明。 資料1 資料2

イ 入学者・卒業生の状況

- ・入学者の推移、昨年度の進路状況等について、教務・学生課長から説明。

資料3 資料4

(2) 平成33年度（2021年度）入学者選抜について

- ・選抜方法の概要について坂田教授から説明。 資料5

(3) 第2期信州保健医療総合計画について

- ・計画の概要について、医療推進課から説明。 資料6

委員から出された質問・意見と、大学からの回答は以下のとおり。

- 今年の入試日程はどうなっていますか。

⇒来週、推薦入試を行います。

- 志願者の状況はどうですか。

⇒昨日が出願の締め切りで、推薦の出願者数は51名。例年よりやや少ない状況です。

- 長野市に新設の看護学部が2校開校します。交通の便も宿舎的にも長野市の方が有利だと思います。この大学にはこの大学の売りがありますので、相対的には落ち込まないと思いますが、新たな入学者選抜方法の説明の中で、卒業後に県内の過疎地域で働こうとする受験生を特別枠で募集するとの説明がありました。地域医療の過疎化を防止する意味で素晴らしい取り組みだと思いますし、県立大学としての責務だとも思います。ただ、そういう縛りが受験生の足を引っ張らないか。せっかくの取り組みが絵にかいた餅になってしまわないか心配があります。仮に、その推薦枠に受験生が集まらないという状況が生じた場合の対応について、お考えがあればお聞きかせください。

⇒ 入学志願者の確保については、長野県内の学生には限りがあり、募集を全国に広げることが一つの方法と考えています。ただ、県外から来て県外に出ていかれては困りますので、募集範囲を全国に広げる学校推薦型選抜Bについては、県内就職を出願資格としています。

- 取り組みとしては素晴らしいし、県立として押していかなければならないところなので、そういった事態が生じたときには、例えば、新たな奨学金制度を設けるとか、ある程度授業料を減免するとか、検討してもらいたいと思います。よろしくお願ひします。

⇒ 本学は現時点では県直営ですが、法人化すると自己財源比率はどれくらいといった厳しい話も出てきますので、質の高い学生を選ぶためにも志願者を増やすというのは一つのポイントだと考えています。最近の学生はへき地に来たがりません。志があまりないと思っています。私はある程度の能力さえあれば、あとは情熱のある人を集めたい。そして、長野県が必要とする人材をここで育成したい。また、全国にこの大学を売り込んでいきたいと思っています。

- 県立大学ということで、県内就職者や県内からの入学者に目がいきがちですが、地域、全国、そしてアジアに目を向けることはすごく必要だと思います。信州は全国の中ではブランド的な地域だと思いますので、全国に目を向けて学生を募集し、卒業後はこの地域に残ってもらうという視点が必要だと思います。この地域も今後10年でリニアとともに大きく変わる可能性があります。そういった視点を今から持って、全国に向けてこの大学の良さを発信してもらいたいと思います。例えば、どこの大学もきれいなホームページを作っています。奇をてらう必要はありませんが、ホームページを見て、「ここに行ってみようかな。」と思ってもらえるようなアピールを全国に向けてして欲しいと思います。県外から来た学生が長野県やこの地域に残ってくれたらすごくいいことです。この地域は日本でも有数のいい地域なので、ここに学生に来てもらうのはいいことであり、そういった視点をお願いします。
- ⇒ この大学は、高いポテンシャルをもっていますが、発信力が弱いと思っています。ブランディングとは、外にどのように発信していくかということです。私どものポテンシャルを最大限に生かして外に発信していきたい。今後ご意見をいただきたいと思っています。
- 今年度は、通常の運営経費とは別に修繕費が約2億円あるとのことですが、老朽化してくると修繕は大変ですが必要なことです。現在は県直営の大学なので修繕費は県予算から出ていると思いますが、独立行政法人化した場合に修繕はどうなるのかお聞かせください。
- ⇒ 法人化した場合には、最終的には県と相談ということになると思いますが、他県の例を見ると、日々必要となるような小破修繕は別として、大規模修繕に関しては県が負担しているところが多い状況にあります。
- この大学は、全員が保健師の受験資格を得られるカリキュラムになっていますが、一方、選択制を取っている大学もあります。看護師の分野では、認定看護師など専門分化した教育を体系化してやっていますが、保健師に関してはなく、私たちはその部分を1年かけて別カリキュラムで勉強してきた経過があります。行政の保健師として働く場合、行政人としての考え方や公衆衛生看護の視点を持ち、即戦力となるような人材育成が必要だと感じています。就職したら、こういった視点を持ってすぐに働ける人材を育成するために、選択制をとって別カリキュラムで教育してもらえるとありがたいと思っています。国では、大学院制度を活用した教育も検討されているようですが、女性の場合、出産・育児で職場を離れる期間もあり、教育期間を延ばすことには疑問を感じています。選択制にして、別カリキュラムで教育を行うことについてお考えがあればお聞かせください。
- ⇒ 現在、本学のように卒業時に保健師の国家試験受験資格を全員が取得できるというのはどんどん少なくなっていますが、本学ではこれからも継続したいと思っています。長野県の健康長寿を支えてきた一つの要素は保健師活動だと思います。この保健師活動については、4年の中で看護師と一体的な形で教えることが効果的だと考えているからですが、皆様方のご意見を是非お聞きしたいと思っています。
- ⇒ 現場の立場として、卒業生などの現状を見た上でのご意見だと思います。大学の教育としてどこまでやるのかという視点もあると思っています。意見交換をしたいところです。私たちも卒業の時点で質の高い状態を求めることを常に考えていますが、現状では保健師として就職するとしても行政機関だけではなくなっています。今まで行政保健師が培って構築してきた方法論などは日本の誇りであり、一生懸命教えていますが、職場ごとに求められる特性や役割が異なり、学んだことを職場で使うには時間が必要な部分もあると思います。そういった意味で、基礎教育と現場のギャップを少なくすることは永遠の課題だと思います。私どもも卒業前教育にはいろいろな工夫をしているところで、現場のご意見をお聞きしながら、卒業前に勉強すべきこと、卒業後に勉強すべきことを整理していきたいと思っ

ています。

- この大学の卒業生のほとんどが急性期病院に就職しています。私の病院も急性期病院で、540人の職員のうち80人くらいが保健師の資格をもっています。保健師資格をもつ職員にアンケート調査をしたところ、いずれは地域に出たいとか、保健師資格を活用していきたいとか、これから子どもを産んだ後も今のままの夜勤を続ける自信がないとか、もう少ししたら自分の人生が何か変わるのではないかなど、保健師資格をもつ人たちはグローバルな視点を持っていることがわかりました。急性期病院では保健師資格を活用できないかもしれませんが、現状は、急性期を在宅に向けて動きだしていますので、退院支援を中心にした病棟で働きたいとか、訪問看護ステーションで働きたいとか、地域を視野に入れて動いていると感じています。
- 大学卒の新人が増えてきていて、資格を取って入ってくる職員が増えているのは事実です。病院から地域に繋がることがとても重要になってきている現在、地域にスムーズに移行するためには、それぞれの職種の人がどんな役割を担って、どんなふうに関わってくるのかを地域の人たちが知ることが重要と感じています。逆に、病院の職員も地域の施設や福祉の現場を経験する機会をつくっている中では、その資格で働いているかどうかは別として、急性期のところにおいても保健師の知識があることは絶対にメリットがあると思います。当院でも何年か働いてから保健師として転職する人もいます。すぐに就職ということだけでなく、病院を知ってから地域に行くというようにうまく繋がっていくようになると思います。また、保健師としての実践力は、それぞれの職場で育てていくものだと思います。

別の質問になりますが、この大学には認定看護師の教育課程がありますが、認定看護師の制度が変わってくる中で、今後の方向性があればお聞きかせください。

⇒ これまで、皮膚・排泄ケア、感染管理、認知症看護の3分野で10年近く実施してきましたが、昨年度くらいから特定医行為のカリキュラムがかなり入り込んできて、運営に苦慮してきたのが実情です。現在開講している認知症看護分野を中心に、2年ほどかけて教育の実情や受講生の動向、これまでに果たした役割等を考えた結果、全国的にカリキュラムが変わるのが主流になる2020年度以降は継続しないことを8月の教授会で決定しました。認知症看護認定看護師を対象に、大学院の専門看護師教育課程を活用してさらにステップアップできる体制を昨年整備したほか、今後は、認定看護師間の相互交流や自己研鑽の場としての長野県認知症看護認定看護師会への支援や高齢者ケア看護研究会の拡充に取り組むなど、本学修了生のキャリアアップの保証、今までの認定看護師教育をとおして得た100人以上の非常勤講師陣とのネットワークを活用した県内医療・介護施設への教育プログラムの提供などに取り組むこととしています。

(4) 看護大学への期待・要望事項等について

- 現在、医療の中心的な役割は病院が果たしていますし、これからもそれは変わらないと思いますが、医療は病院医療から地域医療にかなりシフトしていく、地域医療がとても大切になってくると思っています。現在の実習先は実習病院という感じでクリニックはありません。選定は難しいかもしれませんが、クリニックもあっていいと思います。現在、地域医療というと在宅医療とイコールとまでは言いませんが、かなりダブったイメージがあります。地域医療は在宅医療だけではなく、例えば、小児科でいえば学校看護師とか保育園看護師、企業では産業看護職など、地域に出ていく看護にまで役割が広がってきていると思います。この大学には里山看護というベースもありますので、地域医療とは何なのか、地域で果たす役割にはどういうも

のがあるのかを研究的に考え、この大学から発信していただきたいと思います。

- 要望というよりは願いになってしまいますが、若い人に地元に残ってほしいと思っています。外に出ていく若者は多いですが、戻ってくる若者は少ない状況です。よそから来て学んでもらうことにも大きな意味がありますが、是非この地域に留まって活動し、仕事に就いてほしいと思います。
⇒ 私も地域から学ぶことはとても重要だと思います。地域が発展することはこの大学の発展に繋がると確信しています。これまで以上に地元と近い大学になりたいと思いますのでよろしくお願いします。
- この大学の在り方や理念が学生の底上げをしていると思います。地域の看護学とはどういうものなのかを学んだ学生を多く輩出してほしいと思います。これから人口減や高齢化がさらに進む中で、病院や地域、職場がどのようにやっていくのかを実践するのが、高齢化等が先行する長野県の役割ですし、県直営の看護大学の使命でもあると思います。工夫して取り組んでもらいたいと思います。へき地で働く看護職を育てることも考えているようなので、希望者だけでも、1日だけでもいいので実習先としてへき地へ出かけてもらえるといいと思います。看護を学んだ者として、いつまでも看護に携わっていただけるような、たくましい人材を育ててほしいと思います。
- 私の病院は、実習病院ということでユニフィケーションの提携をさせてもらって、多くの職員が看護大学で学ぶ機会を得ています。職員も楽しみにしてこの大学に学びに来ています。先生方は、本当に大変だと思いますが、ぜひ事業を継続してほしいと思います。
臨床現場では、外科医がとて多職種連携になっています。何をやるにも多職種連携で、それは外せないところがあります。当院も臨床研修指定病院で研修センターを持っていますが、医学生がたくさん来るなかで、研修センター長から、看護学生と医学生が同じ臨床の現場で学ぶ機会があったらいいと思うという提案が出されています。機会があれば、ぜひ協力してほしいと思います。ただ、実習時間がぎりぎりになっているので、どの程度の時間がとれるのかわかりませんが、そういうふうにして結びつきをつけることもいいことだと思いますので、ぜひお願いしたいと思います。
- 先程の大学入学者の選抜の説明の中で、評価の3要素の1つに主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度という項目がありました。病院側も同じで、採用するときには、多様な人たちと主体性を持ってちゃんとかがわれる人材ということをお願いしていますが、面接でそこを見抜くのは難しく、判断しきれないのが現実です。学生のときにそういう部分をどうやって育てているのかを教えてくださいるとともに、社会人になったときに、多分この病院でも社会人基礎力といわれるところや、人と協働しながら主体性を持って働くということも私たちに教えてほしいと思います。大学を卒業して病院や現場に来たときに、継続してどうやって支えるかということが課題だと感じています。そこら辺を基礎教育の中と、その後、実際社会に出てからと、うまく継続して育ててくれたらいいと感じることが日ごろから多いので、大学でどんな工夫をしてそういう部分の力をつけているのかも是非教えてほしいと思います。
- 大学の独立行政法人化ということについて、一卒業生として少し考えてみました。この大学は単科の大学で、規模は小さくても駒ヶ根という地域の特性を生かしながら、法人化した場合には、地域包括ケアと言われ、地域看護とか地域医療を支えることが非常に大切になってきている社会情勢にもスピーディーに対応した特色ある大学運営ができるのではないかと考えて、法人

化は、大学がさらに発展するための手段になるのではないかと個人的には思いました。

私はこの大学で学んでよかったですと今も思っています。先ほど学長先生も言ったように、学生をたくさん集めるためには、この大学のオリジナリティーをもっと発信してもらえるといいと思います。私の病院には研修医の先生が大勢来ていますが、総合診療を学びたいという先生方が増えています。家庭医です。同じようにへき地で看護をしたいと思っている看護師も大勢います。里山プロジェクトももちろんそうですが、卒業生は、家庭医の地域医療や総合診療とか、南信地区を中心に地域を支えるナースをやっているといったところを発信してもらえるといいと思います。

私がここにいたときは、駒ヶ根の方々と一緒に大学をつくり上げているといった感じにとっても魅力を感じていました。私は県外の出身ですが、少し遠くても親が安心して出せるとか、アルプスの絶景とか、自然との触れ合いがあるとか、人の温かさがあるとか、看護で行き詰ったときのリフレッシュ方法をここで学べるとか、そういったところも経験できたらいいと思います。都市部ではありませんが、看護とか人生の真髄を学べる場所になるといいと思います。

この大学には寮がありますが、寮生活は1年しかできません。経済的な理由で寮生活を4年間でできるといいとか、奨学金の制度をどうしたらもっと学生が集まるかなど、在学生に聞いてみるというのではないかと思います。

また、県内の大学が増える中で、大学間交流も行って、教員も学生も含めて、お互いに支え合って、より魅力的な大学づくりをしていただきたいと思います。

先ほどもありましたけれども、大学教育だけでは即戦力になる学生は育成できないと思います。ここは大学で、看護学校とはちょっと違って、学生は本当にさまざまなことを学んでいます。実習の際に私も一緒に働いてみると、看護感とか色々な考え方を改めて学ばせていただくところが多いと感じています。現場では、是非、温かく見守っていただきたいというのが一卒業生としての思いです。

私が今勤めている病院は、行政に支えられている組合の病院です。助産師は、市町村に出向して、子育てをしながら地域の保健師として働くこともあります。地域連携といった部分でも保健師などの様々な資格を取れることは有意義だと感じています。実際勤めてみると、私は助産師として働いていますが、保健師で学んだこと、看護感というものも非常に勉強になったと思います。このまま継続してもらえるとありがたいと思います。

- 大学では、社会福祉学部には籍を置いています。福祉の分野としては、今、大きな課題が2つあります。まとめて言えば少子高齢化ですが、ひとつは俗に2025年問題と言われるものです。団塊の世代が後期高齢者になる2025年を前にして、この後、介護ニーズが急速に出てくるだろう、あるいは認知症も急速に増えるだろうという中で、その人たちの地域での暮らしをどう支えるかという課題です。私の学部はソーシャルワーカーを養成していますが、ソーシャルワーカー、あるいは福祉系の職員だけでは当然支えきれない。だから、福祉系では今どうしても地域包括ケアシステムというような形で、多職種連携で支える以外に支え切れないだろうと考えています。そういう問題について、保健医療と福祉、あるいは介護、そういったところがもっと連携しながら支える人材と支える仕組みをどうしていくのか。国は、包括ケアシステムをつくるということで旗を上げ動いてはいますが、リーダーシップをとっていける人材が本当に育っているのかということ、なかなかそうはなっていません。そういう部分をそれぞれの分野の大学や研究者がもっともっと詰めていかないといけないのではないかと、そういう意味では、福祉分野、保健・医療分野の連携はもっともっと模索されないといけない、そんなふうに感じています。うちの学部も学部改革を今考えていますが、本当に包括ケアの中でリーダーシップをとれるような人材をどう育成していくか。そのときには、生活困難の中では疾病も障害も、当然認知症も重要な問題です。そういうところでより連携を深めながら、地域で暮らすことをどういう側面でどういうふうにするか、もっと役割分担をしながら考えていけるといいと思います。

もうひとつは、少子化のほうの問題です。本当に子どもや赤ちゃんがどういうものなのかという

知識も体験もないまま子どもを産むお母さんたちが増えています。子どもがいる家庭が減っているということは、子どもに接したことがないまま子どもを産む方たちが増えているということです。そこが従来のお母さんたちと違うところです。そうすると、どうしても育児書に頼らざるを得なくなっていくます。育児書に書いてある平均的なお子さんって、むしろそう多いわけではないですから、書いてあるとおりにやってもうまくいかなくて、困って虐待につながってしまったり、育児に行き詰ってしまったり、実はそういうお母さんたちがいます。そこもソーシャルワークだけでは支え切れないですから、母子保健の分野といかに連携しながら、本当に下支えができるかという部分があります。こちらの分野でも実は保健、医療、看護、介護と福祉がどういうふうに連携できるのか、そこでどういう人材を送り出す必要があるのか、それぞれの持ち場、立場は違いますが、相互に連携を図って質の高い人材を地域に輩出できれば、大学設置者の県や市町村にとっても、本当の意味で地域にとって意味のある役に立つ大学になっていけるのではないかと考えています。そういう意味では、看護大学へのお願いというよりは、それぞれの分野で一緒に支え合っていくような協力、協働の関係をつくっていけるといいと感じています。

- 県内には 160 以上の訪問看護の事業所があり、スタッフの人数は 3 人～5 人という小規模な事業所がほとんどです。今、地域に患者さんがかなり流れてきていて、もうあっぷあっぷの状況で、やっぱり人材の確保と教育が課題になっています。40 代から 50 代という年齢層の訪問看護師が地域を支えています。実務も忙しく、小規模なところはなかなか人も出せませんので、教育の機会がなかなか得られません。県からも訪問看護師の育成については大分協力してもらっていて、ありがたいと思っていますが、それでも十分ではありません。そこで、大学にお願いしたいのは、生涯看護を続けていくために、大学の公開講座などで人生長い期間を通しての学びの場を提供してもらえれば、近くの看護の小規模事業所は特にありがたいと思います。病院所属であれば病院側の研修等の機会が結構ありますが、小規模の事業所では学んで成長していくことが難しくなっている現状がありますのでお願いしたいと思います。

在宅の皆さんの近年の状況は、子どもから高齢者まで、多疾患で重度化しています。家族構成も複雑で、本当にどうしたらいいのだろうというような結構問題なケースも多く見受けられます。私自身も保健師の資格を持っていないので、毎日悩みながらやっていますが、保健師資格を持った看護師さんにもどんどん在宅に来てもらえるとありがたいと思っています。看護を地域で生かして、住民の皆さんが悩まないで、一緒に考えながら、ともに成長していけるような、住民の皆さんも自立して、自分たちで看護していくような、自分の体は自分で守りたいなところもあると思います。大学がアプローチするところは、卒業生とか、認定の資格を取られた方とかだけではなくて、公開講座など、地域にいる看護職とか、住民の皆さんに向けた発信をどんどんしていってほしいと思います。

- 皆さんからそれぞれ建設的な意見が縷々ございました。地域医療や多職種連携、2025 年問題も出てきました。重複して申し上げることはありませんが、多職種連携は本当にもう差し迫った問題だと思います。そのときに中心的な役割を果たすのは、恐らく看護師だろうと思います。スキルの的にも能力的にも中心的な役割を果たさざるを得ないだろうということで、看護大学のカリキュラムにそこをかなり組み込んで、そこをしっかりと見据えた教育を是非お願いしたいと思っています。
- ありがとうございます。

皆様方から大変貴重なご意見をいただきました。共通しているのは、これからも地域が中心だということは間違いのないことだと感じました。これからの人口減少の時代、特に 18 歳人口が極端にどんどん減っていきます。その中で、この大学のブランディング化・差別化に取り組んでいく必要があります。それをしながら、私は世界をめざしていきたい。世界の、アジアのナンバーワンになりたいと思っています。ナンバーワンというのは、単なる知名度だけではなく、アジアの多

くの人々に健康と福祉の面で貢献したいと思います。それは地元、ローカルを見ないということではなく、世界を見ることは同時に国内を見ることになると思っています。というのは、私たちのまわりには外国人も増えています。単なる観光だけではなくて、生活者としての外国人もどんどん増えていくと思います。こういったことも含めて、私たちの時代は、IoTやAIの時代になってきているように、どんどん新しく変わっていきます。時代が新しく変わったら、新しい看護のありようを考えていかなければならない。時代に連動するような、そういう看護のありようを私たちは長野県から発信したいと思っています。長野県は、これまでもそうですが、常に地域医療をリードしてきたと思っています。これからもこの大学は地域医療をリードする存在でありたいと思います。皆様方から色々なご意見をいただきたいと思っています。

この運営協議会は、私たちにとってとても大切です。皆様方からのご意見を取り入れながら、この大学をどんどん発展させていきたいと思っています。今年が創立から24年目になりますが、既に創成期を終え、私の時代からは発展期だと思っています。先ほど多種多様な人材を育成してもらいたいといったご意見がありましたが、一つの工夫として、私は海外の多様な人材を受入れ、交流しながら成長していく人間をこの大学で育成したいと思っています。多様なものの考え方を知るとは、同時に、多職種連携の一つの基盤になると思います。長野県はとても安全で自然も豊かで、安定していると思うかもしれませんが、世界は本当に激動しています。2025年問題もありましたが、2025年からは、実は高齢者はそれ以上増えないのではないかと、急性期の病院がどんどん潰れていくのではないかと、むしろ慢性期の地域のクリニックや総合診療の先生方が今増えつつあるとか言われていますが、まさにそうだと思います。そういう地域の中で患者やその家族を支えるシステムを私たちは創造していかなければならない、そういう時代になってきていると思います。この運営協議会の方々というのは、いろんな職種、分野から集まっています。経済の分野から、歯科も含めた医学の分野、看護、保健、訪問看護、介護も含めて福祉、それぞれの分野からの色々な意見を踏まえながら、この大学の新しい価値観とか、新しいビジョンを提示していきたいと思っています。努力する人は夢を見ると、夢を語ると、でも、努力しない人は愚痴や言いわけを言うと言いますが、私は愚痴や言いわけは言いたくないと思っています。この大学の発展のために、あるいは、長野県のために、信州にいる人々のために、この大学の人材、資源を最大限に活用したいと思っていますので、御協力をお願いします。

- この協議会は、近年、年1回の開催なので、議題が大きな話や大学の説明なっていますが、今ご意見をいただいて、毎回でなくてもいいのかもしれませんが、例えば教育の話や看護の話を入れることがあってもいいと思いました。実習場所についてもご意見をいただきましたが、へき地診療所での実習を試みても継続できなかったという状況ですとか、養護学校の看護について学べないかということで特別支援学校に協力をお願いに伺うなど、私たち教員も看護がどこでどんな役割を果たしているのかを基礎教育で体験できないだろうかということについて、いろいろチャレンジして、工夫しているところもあります。そういう具体的な話を議題にするのはいかがなものかという気持ちが今までありましたが、そういうことも議題に挙げていっていいのではないかと思いますし、多職種連携のところでのご意見に関しては、本当にご意見をいただきながら私たちも考えていきたいと思っています。
- 今回の議論の中にいろんな視点があったので、次回以降、幾つかの視点に絞って議論することもいいのかなと思いました。検討させていただきたいので、よろしくをお願いします。

4 閉 会